寸

寸の古い形は、 で、手の象形に、脈所の位置を示した「・」のしるしを加えた指事字です。手首から脈所までの距離を、短い長さをはかる時の単位とし、これを「寸」と言いました。一寸法師というのは、この長さです。一寸の十倍を一尺と言い、十尺を一丈と言います。また一間（畳一畳のたての長さ）というのは六尺です。

寸は、部首としては、多くは“基準”“きまり”の意味で使われます。また、単に“手”（又）の意味に使われることもあります。

寺は、士と寸との会意形声字です。士は“役人”のことですから、寺は、役人がきまりに従って、物をとりきめるところ、つまり“役所”が本義です。中国に初めて仏教が伝来した時、僧に役所を住居として与えたので、僧のいる所を「寺」と呼ぶ習慣が生まれました。そして、僧院がもっぱら「寺」と呼ばれるようになりますと寺は役所の意味には次第に使われなくなりました。音は士（シ）または士（ジ）です。

侍は、寺、つまり役所に勤める人という意味の字です。今の官公吏に当たることばですが、日本の昔では“武士（さむらい）”に当たりますので“さむらい”と読んでいます。また、侍は君側に“はべって”奉仕するので“はべる”“さぶらう”意味にも使われます。侍従。侍臣。侍女。

討は、“きまり（寸）に従って議論（言）する”ことです。「討議」「討論」は、ルールに従って、相互に自己主張をし、また相手を攻撃します。この場合、相手の論旨の欠点をすばやくとらえて、それを攻撃することが大切です。それで“攻撃する”“攻める”という意味にも使われます。討伐。征討。

導は、“頼るべき基準（寸）に従って、人を道びく”ことです。思いつきや、いい加減な考えで行なう「指導」は、導の本義にもとります。ガイドさんが、一定のコースを案内し、一定の解説をしていますが、これはりっぱな「導」です。誘導。先導。教導。

尊は、“酒を入れた酒器を捧げ持って、神または貴人にそなえる”ことを表わした字です。古い字形は で、両手で酒がめを捧げている形になっています。酒を供えるのは相手を“たっとぶ”心の表われであるところから“たっとぶ”という意味を表わしたものです。音は寸（スン）が変化してソン。尊敬。

わが国では、神や貴人に対する敬称として「尊」の字を用い、これを「みこと」と読ませています。日本武尊。

樽は、酒を入れる木製の容器、つまり“たる”のことです。

尋は、 （で手の象形）と工（左の省略した形）と （右の省略した形）と寸（単位）との合意字。つまり、 は、両手を広げて伸ばした時、左手の指先から右手の指先までの長さを、やや長い距離をはかる時の単位とし、これを尋としたのです。わが国ではこれを、両手をひろげるところから“ひろ”と言いました。「ちひろの海原」というのは、「千尋」の意味で、大変に深いという意味ですし、「千尋の谷」というのも、大変に深い谷という意味のことばです。

射は、古い字形は で、弓に矢をつがえた形に手がそえられています。まさに“弓をいる”ことを表わした字です。後に、弓に矢をつがえた字形が、身に似ている所から、誤まって今の字形になったものです。「 」という字体にでも改めたらどんなものでしょうか。

専は、古い字形は で、手に（糸まきの象形）を持った形を表わしています。“子供が糸まきをひとりじめして手から離さない”という意味の“独占”を表わしています。“もっぱら”専門。専心。専属。専任。専用。

守は、きまりの意味の寸と家との会意字で“家によくきまりが行われている”という意味の字です。“きまりをまもる”ことです。